



ウエブの星

KOTONONE
Series of Stories
vol.5

【シリーズ 障害者の就労事例】5

編集部=文
text by Kotonone

信澤邦彦=写真
photograph by Kunihiko Nobusawa



小高公聡さんが拓くフロンティア

物心がつく前つきつけられた

「いつか目が見えなくなる」という過酷な運命。

三〇代にさしかかり、小高さんはその運命と

向き合う時を迎えた。

「地獄を見た」という小高さんを支えたのは、

家族であり、仲間だった。

そして小高さんは今、NTTクラリティで

「ウェブの星」として輝く。

なんても一番最初にやるのが好きだった。



体育館の屋根で
弁当を食べる

「Woo 授業をサボって

陽の当たる場所にいたんだよ

寝こんでたのさ 屋上で

たばこのけむり とても青くて」

(注)

子どもの頃から、小高公聡(こたかともあき)さんは「なんでも一番最初
にやるのが好き」な子だった。高校の昼
休み、体育館の屋根の上に登って、弁
当を食べようと言いだしたのは小高
さんだった。友人二、三人を連れ、弁
当と一緒にラジカセを持ち込み、決
まって流すのはRCサクセション。なかで
も「トランジスタ・ラジオ」がお気に入り
だった。竹の子族が流行りだす少し
前。一九八〇年代の東京・原宿で育つ

た。少し「ませた」子どもだったのか
もしれない。

この時、小高さんは、他の子どもと
は少し違う事情を抱えていた。でもそ
のことが、その先の人生にどんな意味
を持つのか、小高さん自身にもまだこ
の段階ではまったく想像できなかった。

四歳で告げられた

三〇代での失明

「私の視覚障害がわかったのは、四歳
の時。幼稚園の先生に、ものの見方が
おかしい、と言われて行った眼科で「網
膜色素変性症」だと診断されまし
た」。光をとらえ信号に変換する組織
「網膜」に異常が現れる進行性の病気
で、日本では数千人に一人の割合で発
症者がいる。「最初の診察ですぐに、三

〇歳から四〇歳の間に失明する、と
言われました」。

人生が始まったばかりの少年に、いき
なり課せられた「運命」。親は大変だっ
たようだが、自分はまだあまり実感がな
かった、と小高さんは振り返る。四歳に
はなかなか理解しきれない、ということ
もあつただろうが、実際に生活になん
の支障も感じないことも大きかった。「当
時は見え方はそんなにひどくなくて。
視界の中央は見えるけどその周りに
ドーナツ状に見えない部分があつて、そ
のまた外側は見えないんです」。読み書
きは視界の中央でできる。歩くときは
視界の外側を使う。そんなやり方に慣
れていた小高さん。小学校にあがつて学
校生活が始まって、それほど困るこ
とはなかった。「確かに球技は全部「消
える魔球」に見えちゃうとか、教科書
を読むのが苦手だったりとか、そういう
事はありました。でも走るの得意で
したし、目がそれ以上悪くなることも
なかった」。たとえば九九が苦手、たと
えばミンチが食べられない。小高さんは
自分の病気を、そんな、誰もが持つてい
る「得意・不得意」の一つとして捉えて
いたのかもしれない。



視覚障害者だなんて
思ってもいなかった

だから、小高さんは難病を抱えながらも、本人としてはいたって普通の青春時代を過ごした。「自分が視覚障害だっという認識はまったくなくて。ただなんで自分だけ目が悪いんだろう、って思いながらずっと過ごしていましたね」。もちろん、病気の影響はまったくなかったわけではない。たとえば大学は法学部に進んだのだが、第一志望ではなかったという。「もともとは数学が得意で、完全に理系でした。コンピューターも、そこそかセットテープでデータを

記録していた時代からいじつてまし

た」。小さい頃の夢は医者だったという。「でも医者にはなれないとわかっていった」。当時は「欠格条項」があり、視覚障害者は医師免許を取ることができなかった。「高校の先生に医者はやめたほうがいいと言われて。それで別の理系学部に行こうとしたけど、理系はどこにいても実験がある」。視覚障害がある小高さんには、危険を伴う実験は難しい。理系進学は諦めざるを得なかった。悩んだ末に選んだのが法学部。「法律は文系の中でも一番理系に近い。論理学の世界ですから。で、「やむなく」法学部に入学しました」。

学生ベンチャーから
金融機関に就職

「なんでも一番にやってみるのが好き」な小高さんの好奇心は、「やむなく」入った大学でも発揮されることになる。学生時代はベンチャービジネスを手がけた。「高校時代にバンドをやっていたんですけど、その関係で、いろんな大学の音楽サークルを集めてイベントを開催する会社を立ち上げました」。

そのベンチャー企業での仕事を通じて、小高さんは後に自分が飛び込むことになる、金融の世界と出会う。「学生のお遊びだったかもしれないけど、それなりに資金が必要になるわけです。都市銀行を回っても相手にされませんでした。中小企業を相手に融資をしてくれる政府系の金融機関があつて、そこは親身に私たちの話を聞いてくれました」。自分たちのような小さい会社や組織の役に立つ仕事がしたい、と、その金融機関の門を叩いた。数学が好きだった、というのも大きな理由の一つだった。



見えていないんですよ。でも、見えているふりをしていた。

初めての教育担当が
妻・なみさんだった

その金融機関には、三七歳まで、一五年間勤めた。一番よかったことは、入社三年目に、妻・なみさんとの出会いを得たことだろう。「三年目に、新人の教育係に任命されました。私の初めての担当が、妻だったのです」。なみさんは、「彼は私にすごく親切にしてくれました。職場の他の男性がみんな放任主義だったので、なおさら優しい人だな、つて思いました。あとで私にだけじゃなくて、後輩全員に同じように親切にしていた、つてことがわかったんですけどね(笑)」と小高さんとの出会いを振り返る。

教育係は一年で終わり、入社二年目から秘書室に配属されたなみさんに、小高さんはすぐ交際を申し込んだ。それから五年、二人は結婚することになる。「つきあい始める前から病気のことは知っていました。私には不安はなかった。私のいとこが目が見えなかつたっていうこともあって、見えないことはそんなに特別なことじゃないと思っただんです。でも周りが心配して」となみ

みさん。両親も不安には思っていたかもしれないが、目のことを理由に結婚に反対することはなかった、と言う。「いとこのことも頭にあっただけでしょうね。自分で決めたことならそれでいい。ただ目の状態はきちんとわかっておいたほうがいいから、二人で医者に行ってきた、と。それだけでした」。

不安があつたら
結婚は切り出さなかつた

一方の小高さんは、「結婚することのリスクについては、やっぱり考えました」と言う。「と言うか、妻に出会う前は、たぶん一生結婚しないだろうと思っただけです。しかし、交際していたなみさんに結婚の話を持ち出したのは小高さんだ。「あの時は、目が見えなくなるかどうかは関係ありませんでした。自分の中で不安に思うようなことがあれば、自分から結婚を言い出したりはしなかったと思います」と小高さん。この先の人生に自信があつたわけじゃない。今は見えているけど、確実に見えなくなる、このことは変わらないし、変えられない。そうではなく、この先何が

あつても「どうにかする、どうにかなる」という強い決意が、そこにはあつたのだらう。

毎朝、少しずつ
見えなくなる

二〇代後半で結婚。しかし、その後の小高さんの人生は、いよいよ四歳で医者に言われた「運命」と直面せざるを得なくなる時期を迎える。

「二七歳で会社を辞める決意をするのですが、最後の三、四年は、もう地獄のような毎日でした」。

「その時」が、三〇代に入つて、確実に、急速に近づいてくるのがわかった。「毎朝の通勤電車で、どれだけ見えなくなってきたかが確認できるんです。中吊り広告の文字が、だんだん読めなくなってくる」。近視のように、小さく読めなくなるのではなく、文字が薄くなってくるのだという。そのうち、紙の縁がどこにあるのかもわからなくなってくる。「会社でも普通に紙の書類を渡されるのですが、真っ白な紙にしか見えません。ボールペンの文字が読めないんです。サインペンでなぞつてもらうと、文字

がびつしりと書いてあるのがわかる」。

二〇代までは「もしかしたら自分だけ、これ以上悪くならないのでは」と、楽観的に考えていた。でもそんな「特別」は用意されていなかった。同じ病気を持つ他の人たち同様、三〇代に入つて病状は急速に進行した。わかっていたことなのに、心の準備も、体の準備も追いつかない。それも、他の患者と同じだった。

見えていゝるふりをして
仕事を続けた

「見えていないんですよ。でも見えていゝるふりをしていました。だから仕事は全部、家でやっていました」。会社で渡される書類はすべて持ち帰り、なおみさんに読んでもらい、サインペンでなぞつて、読めるようにした。金融機関だから多くの数字を扱う。それもすべて家で暗記した。「それこそ九けたとか一〇けたの数字を何十個となく覚えましたよ。なんであんなことしたんでしょね。辛かったし、ムダでした」。

日常生活に支障をきたすほど目が見えなくなつてきているから、転勤の辞

令を固辞し続けた。結果、与えられる業務の範囲もどんどん狭くなっていった。三年目からやっている新人教育と、信用金庫とのやりとりだけを、ずっと続けていた。

「昼間は結局、仕事をするふりをしていゝるだけなんです。座つて、電話には出るけれど、それ以外は特に何をすることもなく、それも辛い。で、溜め込んだ仕事は夜中の二時、三時までかかつて家でやる。その繰り返し」。事情を知る職場の仲間のサポートにも限界があつた。病院に行つても、医学的な診断を伝えてはくれるけれど、どうしたらいいのかについてはなんのアドバイスもない。見えなくなる、それはわかっている。知りたいのはその先だ。「なんで自分だけこんな不幸な目にあうのか、つて思いながら、それでもなんとかやるしかない、と思いつめていました。やつていゝるつもりでしたけど、限界でしたね」。

辞めると聞いて
ホツとした

会社を辞めると聞いて、なおみさんはホツとしたという。

「私は辞めてほしかったんです。やつぱり見ていると辛かった。家に仕事を持ち帰るのもそうだし、しょうちゅうどこかにぶつかつてケガして帰つてきたり。何か「もう辞めたら」つて言ったことありません。でも彼は「辞めてどうするんだ」つて」。

「同じ病気を抱える人みんなそうだと思うんですけど、見えなくなつたら仕事ができない、生活がどうなるかわからないという不安がすごくありました。結婚もしてますから」と小高さん。実際は、もうほとんど見えてはいない。しかしそのことを自分で認めてしまつたら、そして社会が認めてしまつたら、その先の生活はどうなるのか。それを考えると踏み切れない。そんなジレンマを抱え、動けなくなつていた。

リハビリセンターで
「仲間」と出会う

そんなとき、埼玉県所沢市に「国立障害者リハビリテーションセンター」があることを知った。「あれは新聞か何かでしようか。とにかくひよんなきつかけで近所にあることを知つて、行つてみよう

と」小高さん。結果的にはこの偶然が小高さんを救うことになる。

リハビリテーションセンターに行ってみると、あらゆる障害特性を持つ人たちがいた。何人もの視覚障害者、小高さんのような「中途失明者」も数多く通っていた。「同じ境遇の人がこれだけいるんだ」と知って、それだけで肩の荷が下りたんです」と小高さん。それまで孤独に闘っていた小高さんにとって、仲間の存在は自分の将来を照らす一筋の光となった。

中途失明者である小高さん。会社を辞める直前は、つまり歩いて転んだり、何かにつかることはしろうちゅうだった。そこでまず、日常生活について学ぶ「生活訓練」を半年受け、その後職業訓練を受けた。いくつかあったコースの中で、小高さんが迷わず「プログラミング」のコースを選んだのは、もちろん子ども頃から親しんだコンピューターを活用でき、念願だった理系の技術を身につけることができるからだった。

合同面接会で

NTTクラリティを知る

一年間の職業訓練コースを修了した

あと、就職活動。「金融とITを中心に、五〇カ所くらいは受けました。やはり視覚障害者は『できない』というイメージが強いのか、なかなか内定をもらえませんでした」。苦戦する中、千駄ヶ谷の東京体育館で行われた合同説明会に参加した。「NTTの研究を受けようと思つて」と小高さん。研究所の面接ブラスで話していると、後ろから声をかけられた。NTTグループの特例子会社・NTTクラリティの初代社長・丸山直樹さんだった。「ちょうどその時、アクセシビリティについて話をしていました」。

高齢者・障害者が不自由を感じる、となく情報にアクセスできる設計の考え方を「アクセシビリティ」という。小高さんは以前からウェブのアクセシビリティに興味を持ち、本を読み、情報を収集していた。面接の日が偶然にもアクセシビリティのJIS規格が制定された日というところもあって、面接で出たその話題が、設立準備中だったNTTクラリティの社長の耳に止まった。

「実は会社をつくることを考えているんだけど、アクセシビリティの話が面白そうだから、もう少し詳しく聞かせてくれないか」と話すうちに丸山社長から、絶対に事業化したいから来てくれ、と言われて」と小高さん。

二〇〇五年四月の事業開始を目指して準備中だったNTTクラリティ。障害者三人、健常者五人と、一〇人に満たない人数で、会議室一室だけの設立準備室で始まった。小高さんに不安がなかったといえば嘘になる。でも「設立する、っていうことにすこく惹かれました。自分の好きにやれるんじゃないか、という気がすこくして」。持ち前の「一番最初」にやるのが好き」な性格が出た。不安はあるけど前に進もう、そう思った。

入社してすぐ、小高さんは障害者向けの情報ポータルサイト「ゆうゆう」の立ち上げに参画した。「私を含めて三人の障害者が、話し合いを繰り返して、コメントから考えました」。二人の思いは一つ、一人で悩んでいる障害者に、少しでも多くの情報を伝えたい、ということ。「私たちも一人で悩んできました。仲間がいること、いろんな選択肢があることを伝えられたら、もともと良くなるんじゃないか、と思つて」。二〇〇五年当時、ウェブ上では障害者の暮らしや就労に役立つ情報は、まだそれほど多くはなかった。何よりウェブ上の情報を探

し出すことが、特に視覚障害者には難しかった。そこで小高さんたちは、ウェブ上にある障害者情報を収集し紹介するポータルサイトをつくった。もちろん、さまざまな障害を持つ人が情報に触れることができるよう、アクセシビリティにも留意した。

「ゆうゆう」の立ち上げ、運営を通じて、小高さんはアクセシビリティの知識や経験を積んでいった。すると次第に「アクセシビリティの専門家」として、企業でのコンサルティングや講演活動を行う機会が増えていった。「実際に障害を持つ社員が検証するから、健常者では気づかない使い勝手の悪さに気づくことができる。障害を強みにできる分野だと思つています」。

今は電子書籍の規格の一つ「EPUB」を活用し、読み上げ対応など電子書籍のアクセシビリティを向上させるための取り組みをしている。「電子書籍の音声読み上げ対応は、障害者だけでなく、高齢者にも役立ちます。さらに料理しながらレシピを読み上げたり、ジョギング中や満員電車で本を「聞いたたり」と、障害のあるなしに関わらない、大きな可能性を秘めたジャンルです」。

さりげない
サポートのある職場

小高さんが設立当初から在籍するNTTクラレティ。一〇人に満たない規模で始まったNTTグループの特例子会社は、今では社員数二〇〇人を超える大きな会社に育った。経営企画部の大津昭宏さんは「拠点数が増えるのではなく、同じ規模の拠点数が増えていく形で社員が増えていったため、弊社の社風を損なうことなく規模が拡大できたという面があります」という。「障害を持っている人が障害特性としてできないことは手伝います。でもそのことをあまり意識しないで、自然にできていくのが社風といえるのではないのでしょうか」。

NTTクラレティのオフィスでは、社員同士が仕事の話をしながら同時に、健常者が目の見えない社員を誘導したり、何かを代わりに取っている場面を見かける。また、オフィスの一角で立ち話のように打ち合わせをしているが、よく見ると一人が話した内容をもう一人が手話で通訳していたりする。それらはとても自然で、ばつと見ただけでは、

気にも留めずに見逃してしまいがちだ。「気づかない」とも言えないようなさりげなさでお互いサポートしあう。そんなフラットな空気が、オフィスにはあった。

障害当事者として
初めての「課長」に

そして三年前から、小高さんの新しい挑戦が始まっている。メディア開発部営業企画担当課長に任命され、今は健常者と聴覚障害者、二人の部下を持つている。「NTTクラレティの新しい事業を創出していくこと、障害を自分の強みにした仕事を社内のみんなそれぞれができるようにすること、この二つが私に与えられたミッションです」。障害当事者の管理職は、NTTクラレティとしても初めてだという。

課題は多い。プレッシャーもある。それでも「自分が、障害者の管理職という領域を切り拓いていかないといけない」と感じているという。「なんでしょう。わざわざ厳しいところを選ぶような強い性格ではないのに、立ち向かっていくことが多くですね」と笑う。

自分が、障害者の管理職という領域を切り拓いていかないといけない。



「授業中あくびしてたら
口がでっかくなっちゃった
居眠りばかりしたら
もう目が小さくなっちゃった」
※

「まったく自分のことだから」大好きだったというRCサクセションの歌詞を聴きながら過ごした子ども時代。「なんでも一番最初にやるのが好き」な小高さんのフロンティアスピリットは今、課長として、アクセシビリティの専門家として、新しい世界を切り拓こうとしている。